

英語の完了形 HAVE + *-en* が表す時間指示

山岡 洋

A Study on the Time Reference of the English Perfect

YAMAOKA Hiroshi

桜美林大学

桜美林論考『言語文化研究』第8号 2017年3月

The Journal of J. F. Oberlin University

Studies in Language and Culture, The Eighth Issue, March 2017

キーワード：現在完了形、時制、アスペクト、過去、非未来

Abstract

The time reference of the English Perfect has long been studied by countless researchers such as Reichenbach (1947), Allen (1966), Lakoff (1970), McCawley (1971), Comrie (1976), McCoard (1978), Comrie (1985), Quirk et al. (1985), Klein (1992), Harder (1994), Huddleston (1995), Huddleston and Pullum (2002), Leech (2004), and Declerck (2006). Not only has a complete consensus, however, not been reached, but there is even disagreement on whether the form or the meaning should be classified into tense or aspect.

This paper will reconsider the above discussions such as above and propose that the English perfect makes a “non-posterior time reference.” In the discussions, §1 will describe the theoretical background of the paper, providing the definitions of the technical terms. §2 will give an overview of the development of the English perfect. §3 will deal with various meanings expressed by the perfect in present-day English (PE), especially how the form occurs under various circumstances such as in the indicative finite or nonfinite, the subjunctive (conditional), or the imperative. This section will survey the meanings expressed by the English perfect in these cases. §4 will point out some limitations of the previous studies, and, finally, on the basis of the discussion in §4 and the time reference explained in Declerck (2006), §5 will claim that the time reference of the English perfect covers the time period from the past to the present, which can be expressed as the “non-posterior” time period.

要約

これまで、英語の完了形 HAVE + *-en* が表す時間指示については様々な研究がなされているが、未だに完全なる意見の一致を見ていないどころか、アスペクトを表す形式か時制を表す形式かという基本的な問題に関してすら意見が分かれている。

本稿では、様々な先行研究の議論を踏まえた上で、英語の完了形は「非以降」を表す時制形式であることを主張していく。最初に、本稿で用いる用語の定義と理論的背景を述べ、本稿では完了形は時制形式であることを理論的出発点とすることを明らかにする。次に、完了形が歴史的にどのように発達してきたかについて振り返り、完了形は元々 HAVE + O + *-en* の形式で、HAVE が本動詞として扱われ、時制が現在の場合には発話時における状態を表していたことを見る。次に、現代英語の HAVE + *-en* という形式が、直説法定形動詞、仮定法、命令法、直説法非定形動詞という様々な環境で生起し、どのような意味を表すのかについて観察していく。そして、完了形がこれまでの先行研究でどのような問題点が議論されてきたかを振り返り、それを踏まえた上で、Declerck (2006) で主張されている完了形の時間指示の代案として、完了形が表す本来的な時間指示は過去時から基準時（通常は発話時）に至る時間帯であり、それは言い換えると「非以降（非未来時）」と表現できることを主張する。

§ 0. 序論

英語の完了形が表す時間指示については、Reichenbach (1947)、Allen (1966)、Lakoff (1970)、McCawley (1971)、Comrie (1976)、McCoard (1978)、Comrie (1985)、Quirk et al. (1985)、Klein (1992)、Harder (1994)、Huddleston (1995)、Huddleston and Pullum (2002)、Leech (2004)、Declerck (2006) など様々な研究がなされているが、未だに完全なる意見の一致を見ていないどころか、アスペクトを表す形式かテンスを表す形式かという基本的な問題に関してすら意見が分かれている。

本稿では、このようなこれまでの議論を踏まえた上で、英語の完了形は「非以降」を表す時制形式であることを主張していく。以下、§1. では、本稿で用いる用語の定義を明らかにし、理論的背景について説明をする。§2. では、完了形が歴史的にどのように発達してきたかについて概観する。§3. では、HAVE + *-en* という完了形の形式が、直説法定形動詞、仮定法、命令法、直説法非定形動詞という様々な環境で生起し、どのような意味を表すのかについて観察していく。§4. では、これまでに先行研究でどのような問題点が議論されてきたかを振り返る。§5. では、§4. で触れた問題点と Declerck (2006) で主張されている完了形の時間指示を踏まえた上で、完了形が表す本来的な時間指示は過去時から基準時（通常は発話時）に至る時間帯であり、それは言い換えると「非以降（非未来時）」と表現できることを主張する。最後に、§6. では、本稿での議論を振り返り、残された問題点や今後の展望について述べる。

§ 1. 理論的背景

まず、本稿で用いる用語として、「時制」「時間指示」「アスペクト」「アスペクチュアリティ」を次のように定義する。（以下、下線とイタリックについては、山岡によるものである。）

- (1.1) a. tense (時制) :
grammaticalised expression of location in time (Comrie (1985 : 9))
- b. temporality (時間指示) :
時制によって指示される時点 (cf. 工藤 (2004 : 26))
- (1.2) a. aspect (アスペクト) :
the grammaticalisation of expression of internal temporal constituency.
(Comrie (1985: 6))
- b. aspectuality (アスペクチュアリティ) :
アスペクトによって表される事象の種類 (cf. 工藤 (2004 : 26))

つまり、本稿では、「時制」という用語を時間的前後関係を表す文法形式とし、その時制によって表される時間関係を「時間指示」と呼ぶ。同じように、「アスペクト」は事象の

時間的內部構造を表す文法形式とし、アスペクトによって表される「完結」「非完結」などの時間的內部構造を「アスペクチュアリティ」と呼んでいく。さらに、これらの定義の中で用いられている「文法形式」に関する定義も明確にしておく。この用語が指しうる概念は、時制とアスペクトに関連して言うと、動詞の語形変化に限定するか、助動詞と本動詞の組み合わせも含めるか、いずれかである。アスペクトに関して言うと、元来はギリシャ語やスラブ語のようにアスペクトを表す動詞の語形変化を持つ言語に限ってアスペクトの研究が進められてきた（山田（1984：7））が、それ以外の言語にもアスペクトを表す動詞の迂言的表現や動詞以外の語彙が存在するためにその研究範囲が広げられて、新たな側面からの言語の観察が可能となった。また、次のように最近の時間表現研究の中にも迂言的表現を文法形式として認める研究が少なくない。

- (1.3) a. Linguistic time expressions are either lexical (whether composite like “ten minutes ago” or non-composite like “tomorrow”) or grammatical (whether inflectional or by means of auxiliaries). (Davidsen-Nielsen (1990: 54))
- b. A tense is the pairing of a morpho-syntactic form with a meaning, the meaning being the specification of the temporal location of a situation. Thus, in the future tense, the form ‘*will* + present infinitive’ is paired with the meaning ‘location after speech time’. (Declerck (2006: 94))

(1.3a) では、時間表現を語彙的なものと文法的なものに分け、文法的表現には語形変化と助動詞によるものを含んでいる。(1.3b) では、時制を形態統語論的な形式の組み合わせであるとし、*will* と原形不定詞の組み合わせも時制の一種であると認めている。本稿では、上述のように時制もアスペクトも文法形式を指すものとするが、その文法形式は語形変化のみならず、助動詞と本動詞の組み合わせによる言語形態も含むものとする。

次に、アスペクチュアリティについて、語彙が本来的に持つアスペクチュアリティを「語彙アスペクチュアリティ」、文全体で表されるアスペクチュアリティを「文アスペクチュアリティ」として区別する。

用語法・表記法の最後に、文法範疇と意味範疇を混同させないために、必要に応じて文法範疇は [] に入れて表示し、意味範疇は { } に入れて表示する。例えば、完了形という文法範疇が完了という意味を表す場合などは、文法範疇に用いられる用語と意味範疇に用いられる用語が同じで、その区別が困難であるため、「[完了形 HAVE + -en] は {完了} を表す」というように表記する。それ以外に、以下のように用語を用いていく。

- (1.4) a. スモール・キャピタル：動詞・助動詞の原形
- b. 過去分詞：過去時制の形式と区別するため「-en」で共起する
- c. 事象：「出来事 (an event)」「状態 (state)」の総称
- d. 基準時：時制の起点となる時点

次に、本稿の理論的背景を説明する。まず、完了形をアスペクトであると見る意見と、時制であると見る意見がある。アスペクトとして見る研究は以下の通りである。

- (1.5) a. The perfect auxiliary verb *have* is used to express perfect aspect:
(Greenbaum and Nelson (2009: 40))
- b. 英語には、次のように、完了相・進行相の二つのアスペクトが認められる。
アスペクト→完了相：have + en、進行相：be + ing (安藤(2005：70))
- c. perfect /'pɜ:fɪkt/ *n.* or *adj.*
A distinctive aspect most typically expressing a state resulting from an earlier event, as in *Lisa has gone out* (i.e., she is not here now).
(Trask (1993: s.v. *perfect*))
- d. Some aspectual studies emphasize the meaning of completion conveyed by the perfect. (Brinton (1988: 12))
- e. However, given the traditional terminology in which the perfect is listed as an aspect, it seems most convenient to deal with the perfect in a book on aspect, while bearing in mind continually that it is an aspect in a rather different sense from the other aspect treated so far.
(Comrie (1976: 52))

一方で、完了形を時制であるとする研究には以下のようなものがある。

- (1.6) a. This tense may be said to be a sort of mixture of present and past. It always implies a strong connexion with the present and is chiefly used in conversations, letters, newspapers and television and radio reports.
(Thomson and Martinet (1986: §182B))
- b. The present perfect realizes a temporal schema of its own, and should therefore be considered a tense of its own. (Declerck (1991: 12))
- c. The inflectional preterite and the analytic perfect both qualify as past tenses in that they both, in their basic use, express the anteriority of T_r relative to T_o ; (Huddleston (1995: 111))

結論を先に述べると、本稿では、完了形は時制形式であるとみなして、どのような時間指示をするかを明らかにしていく。その最大の理由として挙げられるのが、Ogihara (1996: 10)) による次の指摘である。

- (1.7) a. A tense morpheme can be regarded as any expression that serves to affect the time of evaluation for a sentence without changing its “propositional content.” On the other hand, aspect morphemes affect the “propositional content” itself. (Ogihara (1996: 10))

この基準によれば、時制形式は述べられている命題内容に影響を与えることはないが、アスペクトは命題内容そのものに影響を与える。これは、「ある文法形式（例えば英語の進行形）が命題内容に影響を与えたとすれば、そこに意味的な衝突が生じた場合に容認不可

能となるということ」(山岡 (2001: 234)) を意味している。アスペクト形式として認められる [進行形] が、共起する動詞の {語彙アスペクチュアリティ} によって容認不可能になることがあるのに対して、[完了形] は、{語彙アスペクチュアリティ} に影響されて文全体の容認度が変わることがないことから、アスペクト文法形式とは言えない。

- (1.8) a. John has sung.
b. John is singing. (Comrie (1976: 44))
c. We've known each other since 1974.
d. *I am knowing exactly what you mean. (Swan (2005: §313.3))

(1.8) の現象から、以下のことが分かる。まず、[完了形] はアスペクト形式ではないために、共起する動詞が {動作} を表す動詞 (言い換えると、{有界的 (bounded)}) な動詞であっても、{状態} を表す動詞 (言い換えると、{非有界的 (non-bounded)}) な動詞であっても、命題内容に影響を与えないために意味的な衝突を起こすことがない。一方で、[進行形] はアスペクト形式で命題内容に影響を与える (言い換えると、動詞が表す意味内容に影響を与える) ために、共起する動詞が {動作} を表す動詞の場合には共起可能であるが、{状態} を表す動詞の場合には共起不可能になると言える。

このような理由から、本稿では、理論的背景として、(1.6) に挙げたような、完了形は時制形式であるという主張に従って論を進めていくこととする。

なお、完了形には、Winter is come. のような BE + *-en* の形式も存在するが、本稿では HAVE + *-en* の形式のみを考察対象としていく。

§ 2. 完了形の発達の歴史

本節では、現代英語の完了形 HAVE + *-en* が歴史的にどのように発達してきたのかを概観する。

- (2.1) 完了形「have + 過去分詞」は古英語の「habban (>have) + 対格目的語 + 過去分詞」の構文から発達したと考えられている。この構文の habban は「持つ」の意味を表す動詞であり、過去分詞は目的語を修飾する形容詞であった。形容詞である過去分詞は、修飾する目的語の性・数・格に従って屈折変化した。また、この構造の過去分詞は他動詞であるので、受動の意味を表した。

ic habbe þā bōc writenan.

(= I have the book written.)

(= I have the book in the written state.) (橋本 (2005: 157))

このように、現代英語の完了形 HAVE + *-en* の形式は歴史的には古英語 (OE) の時代に遡り、当時は HABBAN + O + *-en* という形式で、「NP が過去分詞である状態を所有する」(保坂 (2014: 113)) という意味を表していた。(NP は名詞句を表す。)

寺島 (1990 : 112) によると、「MEになると have + 過去分詞 (+ 目的語) 構文が完全に確立した。しかし現在完了の場合、現在や過去時制と区別されずに混用されている。」つまり、中英語 (ME) の時期に形式的には現代英語の形式が確立したが、意味的には、現代英語における完了形の表す意味は確立されていなかったことになる。

このような完了形の形式と意味の変化は、概略次のように説明される。(2.2) の例文は、聖書のヨハネによる福音書13章12節である。

- (2.2) a. Syððan he *hæfde* hyra fet *apwogene*, (West Saxon Gospel)
 b. And so aftir that he *hadde* iwaishun *the feet of hem*, (Wyclif)
 c. So after he *had washed* their feet, (Authorized Version)
 d. After he *had washed* their feet, (New Revised Standard Version)

なお、意味が希薄化した have は目的語に意味役割を付与する力を失い、代わって目的語は過去分詞から意味役割を付与されるようになり、have の目的語は過去分詞の目的語へと変わると考えられます。同時に過去分詞も古英語の形容詞的役割から動詞的役割へ変化し、…have の 文法化 という構造変化がもたらされたと考えられます。

[VP have (本動詞) [SC NP pp (形容詞)]]

↓

[IP [I have (助動詞) [VP pp (本動詞) NP]] (保坂 (2014 : 115-16))

SC : Small Clause

つまり、保坂 (2014) によれば、目的語名詞句は、本来OE期にはHAVEから意味役割を与えられており、言い換えれば、HAVEの目的語であったものが、歴史的な変遷で、本来修飾の機能を果たしていた過去分詞から意味役割を与えられるようになり、過去分詞の目的語として扱われるようになったと言える。結果として、HAVEは文法化して現代英語では助動詞としての扱いを受けるわけである。Hopper and Traugott (2003: 4) によれば、内容語 (この場合、本動詞) から機能語 (この場合、助動詞) への変遷は文法化の典型例のひとつであり、ここで重要な点は、現代英語で助動詞として扱われている完了形も、元をたゞせば本動詞であったという点で、これは、かつてはHAVEの時制によって表される時間指示が文全体の時間指示となっていたということになる。

§ 3. 現代英語における完了形の形式と意味

本節では、最初に現代英語における完了形にはどのような形式が存在し、次にそれぞれの形式がどのような意味を表すのかを確認していく。

まず、現代英語における動詞の形式は、主語の人称や数、および時制によって変化をする定形動詞 (finite verb forms) とそのような変化をしない非定形動詞 (non-finite verb forms) に分けられる。まず、定形動詞の種類は以下の通りとなる。

- (3.1) a. John had left when Bill arrived. [直説法過去完了]
 (Declerck (1991: 40))
 b. He has lost her memory. [直説法現在完了]
 (Swan (2005: §427))
 c. We will have finished by tomorrow afternoon. [直説法未来完了]
 (Swan (2005: §427))
 d. ^(?) It is important that he have learnt these words by the time I go. [仮定法現在完了]
 e. She wished he hadn't had to leave before the end. [仮定法過去完了]
 (d、eともに Huddleston (1995: 110))
 f. Start the book and have finished it before you go to bed. [命令法]
 (Quirk et al. (1985: 872))

次に、非定形動詞には以下のようなものがある。

- (3.2) a. Students *must* have completed Sociology 101 before they can take
 Sociology 102. [原形不定詞]
 (Webster: s.v. *must*)
 b. I'm sorry to have disturbed you. [to不定詞]
 (Swan (2005: §427))
 c. Having seen the film, I don't want to read the book. [分詞]
 (Swan (2005: §427))
 d. She's angry about not having been invited. [動名詞]
 (Swan (2005: §427))

次に、一般に指摘されている、現在完了形が表す意味は以下の通りである。

- (3.3) a. John has just left. {近接過去}
 b. I have eaten lunch (and am therefore not hungry now). {結果}
 c. I have been abroad several times. {経験}
 d. We have known him since he was a child. {継続} (Brinton (1988: 10))

さらに、現在完了形が表す本質的な意味としては、以下のような指摘がこれまでになされてきている。

- (3.4) a. Current Relevance
 The perfect expresses a present state resulting from past action.
 b. Extended Now
 The perfect expresses a past event which is unidentified as to time.
 c. Indefinite Past
 The perfect expresses a past event within a time span which is continuous with the present, not differentiated into "then" versus "now."

d. Embedded Past

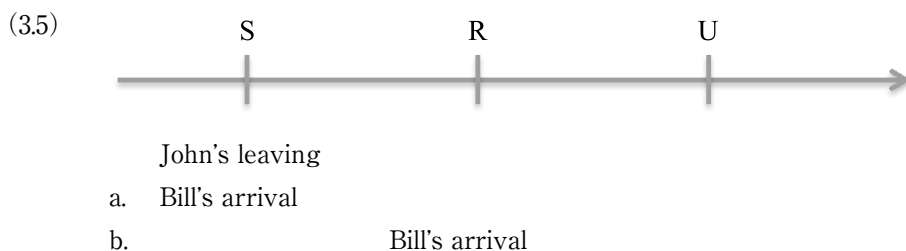
The perfect is made up of a past-tense sentence embedded as sentential subject of a present-tense predicate. (McCoard (1978: 18))

(3.4a) は、完了形は常に現在との関連性を持っているという主張で、特に重要な点は、現在の状態を表していると指摘している点である。(3.4b) は、完了形が現在までのびる過去を表しているという主張で、重要な点は過去時を表していることを指摘している点である。(3.4c) は、完了形が不定過去を表しているという主張で、重要な点は現在とは切り離せない過去を表しているという点である。最後の (3.4d) は、完了形が現在時制に埋め込まれた過去を表しているという主張で、述べられている事象が過去に存在したことを述べる形であるという考えである。これらは、いずれも同じ現象を異なった表現で表しているとも言える。本稿では、これらのすべてが、過去時と現在時の両方に言及している点に着目し、完了形が表す本質的意味を再考していく。

さて、ここで注意すべき点は、(3.3)、(3.4) で述べられているのが現在完了形の表す意味であるという点である。(3.1)、(3.2) で示したように、完了形には現在完了形以外にも様々な形式がある。[現在完了形] が表す意味を仮に [完了] と名付けると、[現在完了形] 以外の [完了形] は [完了] 以外の意味を表しうる。例えば、(3.1a) の過去完了の場合、when Bill arrived という副詞節は John が出発した後の時点を目指すことも可能であるし、John が出発した時点を目指すことも可能である。

(3.1) a. John had left when Bill arrived.

この文で示されている時点は3つある。ひとつは発話時。これを仮にU (Point of Utterance) で表す。もう1つは発話時よりも前の時点で John の出発よりも後の時点。これを仮に参照点 (Point of Reference) と呼び、R で表す。最後のひとつが John が出発した時点。これを仮に事象点 (Point of Situation) と呼び、S で表す。これを図示すると次のようになる。



(3.5a) の解釈の場合、John の出発が Bill の到着時によって特定化されているために、John had left という過去完了形は John left という単純過去形がさらに過去に転移したものである。一方、(3.5b) の解釈の場合には、Bill が到着した時点では既に John の出発が過去のものとなっていたことになるため、John has left という現在完了形が過去に転移したものである。このように、[現在完了形] 以外の [完了形] は、[完了] 以外に単純過去時制が担う [過去] の意味も表す。つまり、基準となる時点が発話時の場合には、[完了]

の意味は「現在完了形」が担い、「過去」の意味は「単純過去時制」が担っているが、基準となる時点が発話時以外の場合もしくは非定形動詞の場合には、「完了形」が「完了」と「過去」の意味を表す形として用いられているのである。

§ 4. 完了形に関わる問題

本節では、完了形に関してしばしば引き合いに出される問題点として、participant property（参与特性）、gnomic present（格言的現在）、performative verbs（遂行動詞）、present perfect puzzle（現在完了の謎）という4つの点について観察していく。

§4.1. Participant Property

- (4.1.1) a. **Einstein* has taught me physics.
b. I have been taught physics by Einstein. (Chomsky (1971: 212))

(4.1.1a)のように、現在完了形を用いる場合には、その主語は現存していなければならず、故人が主語となると容認不可能になる。一方で、同じ事象を表す場合でも、態を変換して主語を入れ換えると容認可能となる。このような現在完了形の特性をParticipant Property（参与特性）と呼ぶが、主語そのものが現存していなくても、次のような場合は容認可能になる。

- (4.1.2) a. *Newton* has explained the movements of the moon.
b. *Newton* explained the movements of the moon from the attraction of the earth. (Jespersen (1949: 66))

(4.1.2a)の場合、月の動きを説明しているのはNewton本人というよりは、Newtonの理論が説明しており、そのNewtonの理論は今でも存在しているために容認可能となる。一方、(4.1.2b)の場合、地球の引力から月の動きを説明するというのはもう現在ではその正当性を失っているために、過去時制のみが可能となる。Smith (1997: 108)はこのような特性をFelicity Condition（適切条件）と呼んで次のように定義している。

- (4.1.3) The person to which the subject nounphrase refers must be pragmatically able to bear the property ascribed to them.

ここで述べていることは、主語の現存だけではなく、その性質を述べることができる場合には容認可能になるというものである。

これまで述べてきたことが、一般に現在完了形にまつわるParticipant Propertyと呼ばれる性質であるが、実はこの性質は、単純現在時制にも共通する性質である。

- (4.1.4) a. *Shakespeare* has written impressive dramas.
b. **Shakespeare* has quarreled with every other playwright in London.

- (4.1.5) a. *Shakespeare* is a renowned playwright.
b. **Shakespeare* is a notorious drunkard.

((4.1.4)、(4.1.5) ともに Lakoff (1970: 844))

Shakespeare という作家が書いた作品の影響が現在でも有効であることから、(4.1.4a) は容認されるが、Shakespeare がロンドンにいる他の作家と口論をしたという事象の影響は現在では無効であるために (4.1.4b) は容認不可能になる。同様に、シェークスピアが著名な作家であるというのは、彼の作品や功績が現在でも有効であることから言えることであるために、(4.1.5a) は容認可能になるが、シェークスピアが名うての酒飲みであったということは、現代においてその影響が残っているわけではないために、単純現在時制の使用が許されず、(4.1.5b) が容認不可能になるのである。

これらの言語事実から導き出せるひとつの結論としては、[現在完了形] に関連してしばしば言及される Participant Property は、本質的には [単純現在時制] に起因するものであるということである。そして後に述べるように、これは [現在完了形] が {現在} 時間指示を意味することを裏付けるものである。

§4.2. Gnomic (or Generic) Present

Gnomic Present は「格言的現在」、Generic Present は「総称的現在」としばしば訳される用語であるが、その意味するところは、主語名詞句の性質や属性について述べる文のことで、典型的にはこの種の文には現在時制が用いられる。

- (4.2.1) a. Two and two is four.
b. Horses do not eat meat. (以上、Declerck (2006:130-31))

しかし、現在完了形にもこの用法がある。

- (4.2.2) a. You've defined it when you've found the necessary criteria.
(必要な基準を見つけたらそれを定義したことになる) (Ota (1963: 42))
b. You've not defined it until you've found the necessary criteria.
(Ota (1963: 42))
(定義というものは必要な基準があってはじめて成り立つものだ)
c. We feel happy when we have done a kindness.
(親切な行為をしたときは、うれしいものだ)
d. I always know from the way she looks that she's had a letter from her son.
(彼女に息子さんから便りがあると、顔つきで必ずわかります)
総称的な意味を表す用法は、現在時制独自のもので、一部の例外を除いて、過去時制で表されることはない。(cf. Care *killed* the cat.)

(以上、江川 (1991 : 240))

(4.2.2a, b) はともに、「～をしてしまえば、…をしたことになる」という意味の一般論を述べており、(4.2.2c) は「～をした後は…という気持ちになる」というこちらも人間全般に言える一般論を述べており、これら3例の主語 you, we は一般の人を表している。そ

れに対して、(4.2.2d) はIもしくはsheという個人に関する記述ではあるが、その個人の一次的ではない特徴を述べているという点で、総称文の一種であると言える。いずれの場合も、[現在完了形] の持つ {現在性} が前面に出て、このような用法で用いられていると言える。この事実は、次のような現在進行形の場合にも当てはまる。

(4.2.3) a. When children are doing nothing, they are doing some mischief. (江川 (1991 : 228))

b. Time passes quickly when you're having a good time. (江川 (1991 : 227))
(4.2.3a) は、(4.2.2a, b) 同様、主節従属節ともに迂言形が用いられている例で、「～をしている時には…をしているものである」という一般論を述べている。(4.2.3b) は、(4.2.2c, d) と同じように、従属節中が迂言形で主節が単純形になっている例で、「～をしている時には…なものである」という、こちらも一般論を述べている。この場合も、[現在進行形] の {現在性} が前面に出ている例と言える。

§4.3. Performative Verbs

Performative Verbs (遂行動詞) とは、ある発話をするのがすなわちその発話の内容となっている行為を遂行したことになるような動詞のことを言う。

(4.3.1) I promise to let you have it back tomorrow. (Huddleston (1995: 103))
この場合、「約束するよ」と発言することそのものがその行為を起こしたことになる。これも、原則としては、現在時制の用法であるが、現在完了形も稀にこのように用いられることがある。

(4.3.2) One more word and you have sealed your fate. (Declerck (1991: 68))
ここでの have sealed という [完了形] は、上記のような純粋な遂行動詞の用法とは異なるが、もう一言発すれば、それはすなわち命がないという瞬間的な同時性を表すという意味では、(4.3.1) の遂行動詞の用法に相通ずるものがある。そして、これも、[現在完了形] が持つ {現在性} の現れと見ることができ、この場合には {現在性} の持つ {瞬間性} が表出している例であると言える。

§4.4. Present Perfect Puzzle

英語の [現在完了形] は、本質的に {不定過去} を表すために、{不定過去} を表す副詞語句とは共起できるが、{定過去} を表す副詞語句とは共起できない。一方、[単純過去時制] は {定過去} を表すために、{定過去} を表す副詞語句と共起できる。

- (4.4.1) a. *John has left at four.
b. John left at four. (以上、Giorgi and Pianesi (1997: 85))
c. * When has Chris left York ?
d. Chris has just/recently arrived. (以上、Klein (1992: 525))

(4.4.1) において、at four や when は {定過去} を表しているため、(4.4.1a, c) のように

[現在完了形]とは共起できないが、(4.4.1b)のように[単純過去時制]とは共起できる。また、(4.4.1d)のように、{不定過去}を表す副詞語句は現在完了形と共起できる。このような、[現在完了形]が{定過去}を表す副詞語句と共起できない現象をPresent Perfect Puzzleと呼ぶが、この現象は現在完了形が明らかに{過去時}を指示している証拠で、[単純過去時制]が{定過去}を表し、[現在完了形]が{不定過去}を表すという役割分担が現代英語ではなされている。

§4.1.から§4.3.までは、[現在完了形]が表す{現在性}について観察したが、ここで明らかなのは、[現在完了形]が{過去時}を表すということである。ただ、注意を要するのは、Present Perfect Puzzleはあくまでも[現在完了形]に見られる現象であるという事実で、現在完了以外の[完了形]の場合には、上の(3.1a)の[過去完了形]で見たように、[現在完了形]の過去、すなわち{不定過去}と、[単純過去形]の過去、すなわち{定過去}の両方を表しうるのである。次の(4.4.2a)は、法助動詞の補部として[完了形]が現れた場合、(4.4.2b)は不定詞toの補部として[完了形]が現れた場合、(4.4.2c)は分詞構文として完了形が現れた場合であるが、これらの非定形動詞ではすべて[完了形]は{定過去}を表している。(ここでの{定過去}は、(3.5)での{過去}に相当する。)

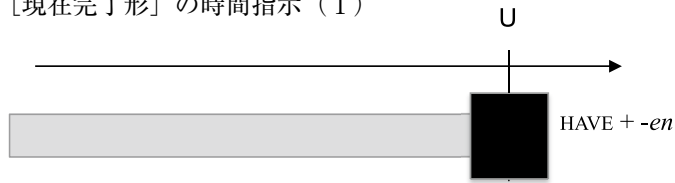
- (4.4.2) a. Bill may have been in Berlin before the War (It is possible that Bill was in Berlin before the War).「法助動詞の補部」
b. The security officer believes Bill to have been in Berlin before the War (The security officer believes that Bill was in Berlin before the War).「不定詞」
c. Having been in Berlin before the War, Bill is surprised at the many changes (As he was in Berlin before the War, Bill is surprised at the many changes).「分詞」 (Comrie (1976: 55))

本節では、[現在完了形]が{定過去}を表す副詞語句とは共起しないというPresent Perfect Puzzleの問題を扱ってきたが、{定過去}を表す副詞と共起可能な[その他の完了形]の場合も併せて、HAVE + *-en*という[完了形]は一貫して過去時を表すことを見た。次節では、本節で観察した[完了形]の{現在}と{過去}の時間指示を考慮しながら、[完了形]が本質的にどのような時間指示を表すのかを考察していく。

§ 5. 完了形が表す時間指示

§4. では、§4.1.でParticipant Property、§4.2.でGnomic Present、§4.3.でPerformative Verbsを扱い、これらの節では[現在完了形]の持つ{現在時間指示}を観察し、§4.4.ではPresent Perfect Puzzleを扱い、[現在完了形]の持つ{過去時間指示}を観察した。この[完了形]の表す時間指示を図示すると次の(5.1)のようになる。これは、作業仮説として提示するため、現在完了形の表す時間指示の(1)とする。

(5.1) [現在完了形] の時間指示 (1)



U: 発話時 (Point of Utterance)

しかし、ここで改めて明確にしておかなければならないことは、Participant Property, Gnostic Present, Performative Verbsに関する観察の際に見たように、(5.1)における黒い四角によって表されている「現在性」は「単純現在時制」によるもので、HAVE + *-en*の形態が本来的に表す時間指示ではない。これは、明らかに §2で述べた、完了形を形成する助動詞HAVEが歴史的にかつては本動詞として機能し、「現在時制」の場合に明確な「現在時」を表していた名残であると考えられる。しかし、現代英語では、特に、HAVE + *-en*の形式が「定過去」時間指示になる場合には、このような「現在」時間指示は表出しない。では、現代英語におけるHAVE + *-en*の形式はどのような時間指示をするのであろうか。

ここで、Declerck (2006) による、現在完了形の時間指示に関する主張を紹介しておく。

(5.2) a speaker using the present perfect tense is concerned with NOW rather than with THEN (Declerck (2006: 211))

(5.3) The present perfect locates the situation time in the pre-present, i.e. in that portion of the present time-sphere that precedes t_0 (without including it). (Declerck (2006: 212))

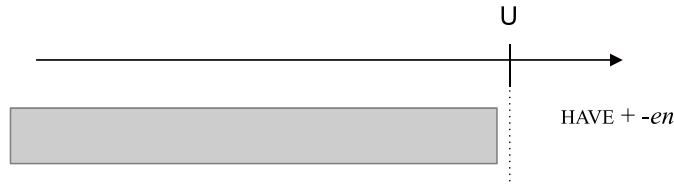
(5.2) では、現在完了形を用いる話し手の視点は過去よりも現在に置かれると述べながらも、完了形が表す時間指示は、現在を含まない過去を指すと明確に述べている。そこで問題となるのが、「現在完了進行形」などが「現在まで至る過去」を表す場合であるが、そのような場合については、次のように述べている。

(5.4) I have been working in the garden [for two hours now, and I still haven't finished.] (Declerck (2006: 216))

(5.5) The continuative interpretation itself is triggered by factors other than the tense structure, such as the progressive form and/or the presence of an adverbial like *since 1995 or for two weeks now*, etc. (Declerck (2006: 225))

(5.4) のように仕事をしている状態が現在時にまで及ぶような解釈は、現在完了形が本来的に表す時間指示によるものではなく、進行形や共起する副詞語句の影響によるものであるという考えである。このDeclerck (2006) による主張を図示すると、次の(5.6)のようになる。これも、作業仮説として提示するため、現在完了形の表す時間指示の(2)とする。

(5.6) [現在完了形] の時間指示 (2)



U: 発話時 (Point of Utterance)

本稿では、この Declerck (2006) の主張に対し、以下で副詞 *nowadays* と現在完了形との共起関係を精査して、結論としては、現在完了形は過去から発話時に至るまでの時間帯を表すことを主張する。

*OALD*⁸によると、副詞 *nowadays* は次のような意味を表す。

(5.7) at the present time, in contrast with the past

つまり、*nowadays* は過去と対比した現在を表すということであるが、これに付随して *nowadays* は現在完了形とは共起しないということがしばしば指摘される。

(5.8) Present time-when adverbials such as *nowadays* and *these days* cannot accompany either the Present Perfect or the Past – they require the Simple Present or Present Progressive. (Leech (2004: 45))

しかしながら、実際には次の例のように *nowadays* が現在完了形と共起する例は見られる。

(5.9) Sleep is as important as food and water to your body but many people don't get enough. Are you getting enough sleep?

In the past, our ancestors slept when it was dark and woke when the sun came up in the morning. People lived in harmony with nature but nowadays modern technology has upset the natural cycle of sleeping and waking. This can be a serious problem. (It's Time to Read: 26)

ここでは、睡眠がかつては日の入りと日の出に合わせて就寝と起床が行われていたが、今では科学技術の発達によりそのサイクルが完全に狂ってしまったことを述べている。ここで重要な点は、*people lived in harmony with nature* という過去の事象と *modern technology has upset the natural cycle of sleeping and waking* という現代の事象が明らかに対比されているという点である。

Declerck (2006 : 620) は、現在完了形が現在時間指示の副詞 *now* や *at present* と共起できるのは過去に生じた事象の結果として生じた現在の状態を評価する場合で、以下の4つのタイプに分けられると述べている。

(5.10) a. the sentence may contain a quantificational NP and 'measure' the progress which the situation starting before t_0 has made at t_0 . In this case *at present* can be used, but not *now*.

{At present / *now / up to now} only half of the goods have been sold.
[We will have to make a special effort to sell the rest.]

- b. The second type is similar, but now the VP is not telic and what is measured is the length of a situation that started before t_0 and still continues at t_0 . Both *now* and *at present* are acceptable.
At present we've been living here for three months. [That's not a very long time.]
- c. In the third type, the speaker sums up what is the latest state in the actualization of a chain of dynamic situations. The sentence is interpreted as 'Now it is the case that X is the latest event':
[He's completely out of control. Last week he stole a bike.] Now he's been arrested for dealing hash. (*indefinite interpretation*)
- d. In the fourth type, the speaker evaluates a given state of affairs. The sentence is interpreted as 'Now X appears to be the case' or, more generally, 'The latest state of affairs is that state X holds as a result of the actualization of Y'.

(5.10a) は過去からどれだけ進歩したかを数量的に評価する場合、(5.10b) は目標点を持たない (not telic) 事象の場合、過去からどれだけ進歩したかを期間的に評価する場合、(5.10c) は一連の最新の事象をまとめる場合、(5.10d) は事象の生じた結果今どうなっているのかを述べる場合である。これらは、上述のように現在完了形と *now* や *at present* との共起関係をタイプ別に分けたものであるが、Declerck (2006 : 621) は、現在完了形と *nowadays* の共起関係に関して次のように述べている。

(5.11) *Nowadays* can combine with the present perfect in the fourth of these meanings only:

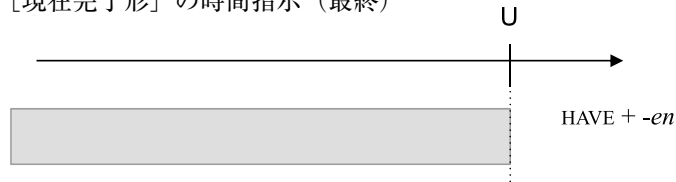
- a. {At present / *nowadays} I've only met two of his four sisters.
(*interpretation 1*)
- b. {At present / *nowadays} we've been living here for three months.
(*interpretation 2*)
- c. [He's completely out of control. Last week he stole a bike.]
{Now / *nowadays} he's been arrested for dealing hash. (*interpretation 3*)
- d. It has become unclear nowadays whether ... (www) (*interpretation 4*)
- e. Nowadays, food has become easier to prepare. (www) (*interpretation 4*)

つまり、*nowadays* の場合には、(5.11d) の場合のみ現在完了形と共起可能で、これを (5.9) に当てはめると、科学技術の発達の結果として、現代では就寝と起床のタイミングが狂ってしまったということになるのである。

以上のことから、*nowadays* が過去と現在を対比する場合であっても、現在完了形と共

起することが可能なのであるから、少なくとも〔現在完了形〕が〔現在との対比〕の意味で用いられるということは、現在との対比をするためには、現在完了形が指す時間域が現在を含んでいなければ対比はできないということになる。そうすると、Declerck (2006: 621) の主張する (5.6) のような現在を含まない時間指示は、現在完了形が表す時間指示としては不適切ということになり、その代わりに、次に示すような、過去から現在の時点に至る時間域を現在完了形は意味すると考えるのが必然である。今回は、作業仮説 (1) (2) に続く最終的な結論となるため、(最終) として表記する。

(5.12) 〔現在完了形〕の時間指示 (最終)



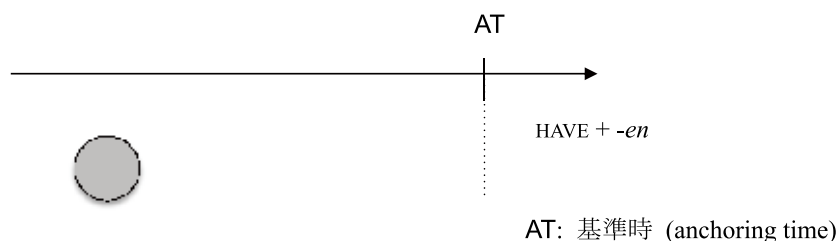
U: 発話時 (Point of Utterance)

このように、〔現在完了形〕は現在時と過去時を含む時間域を指示するため、本稿では〔現在完了形〕を「〔非未来〕時間指示表現 (a non-future temporality expression)」と名付け、〔非未来〕が〔現在完了形〕の表す時間指示であるとする。

ここで、(5.1) の (1) と (5.12) の (最終) との相違は、nowadaysが原則として現在完了形とは共起しないという事実によって説明される。nowadaysは現在時制とは共起できるため、nowadaysと現在完了形の共起関係は現在時制の共起関係とは別の問題ということになる。この時点で、現在時制の現在性が表出している (1) の場合と、nowadaysと現在完了形の共起関係は別問題ということになる。したがって、例外的に「事象の生じた結果今どうなっているのかを述べる場合」という過去と現在とのつながりが明確な場合にのみ nowadays との共起が可能であるという事実は、(1) によってではなく、(最終) によって説明されるのである。

さて、本節では、ここまで、〔現在完了形〕が表す〔完了〕の意味が時間指示としてはどのような時間域を指すのかについて、Declerck (2006) の主張に対する代案を提示してきたが、現在完了形以外の〔完了形〕は〔完了〕はもとより、§3. (3.5a) や §4.4. (4.4.2) で見たような〔過去〕 (もしくは、〔定過去〕) を表す。この現在完了形以外の〔完了形〕が〔過去〕を表す場合の時間指示を図示すると次のようになる。

(5.13) 現在完了形以外の〔完了形〕の時間指示



現在完了以外の〔完了形〕が〔過去〕を表す場合には、基準となる時点は発話時に限らないためATで表記した。丸で表されている事象は定過去に生起し、基準時との関わりを持たない。この点が〔完了形〕が〔完了〕を表す場合と異なる点である。

これら2つの意味を比較した場合、本来的には〔完了〕の意味の方がHAVE + *-en*の表す本質的意味であると考えられる。〔過去〕は〔単純過去形〕が本来的に表す意味であり、基準時が発話時以外の時には、HAVE + *-en*形が代わりに〔過去〕の意味を表すと考えられるからである。しかし、〔過去〕もHAVE + *-en*形が表す意味の1つであり、仮に〔完了形〕が〔完了〕と〔過去〕の両方を表す形式であるとしても、上述の〔非未来〕という表現は、〔完了〕と〔過去〕の双方をも含むため、発話時だけではなく様々な時点を基準時とするHAVE + *-en*は〔非以降〕を表すという提案を本稿の結論とする。

§ 6. 結論と今後の展望

本稿では、HAVE + *-en*という現代英語の形式がどのような時間指示を表すかという疑問について、§ 2で完了形の発達の歴史を顧みて、§ 3では、現代英語の完了形がどのような意味を表すかを見た。§ 4では、これまでに先行研究で取り上げられてきている、現在完了形に関する様々な問題を取り上げ、§ 5では、Declerck (2006)による完了形は現在時を含まない過去を表すという主張に対して、完了形は〔非過去〕を表す形式であるという提案を提示した。本稿での考察をまとめると以下ようになる。

- (6.1) 〔完了形〕HAVE + *-en*は、歴史的には本動詞HAVEから発達し、時間指示も本来は〔現在〕時間指示であった。中英語以降、文法化が進み、時間指示の点でも変化が現れ、現代英語に至るようになったと考えられる。
- (6.2) HAVE + *-en*の形式は、現在時(発話時)を基準とする現在完了形と、それ以外の時点を基準とする完了形は事情が異なり、現在完了形のみが〔不定過去(完了)〕のみを指すことができ、〔定過去(過去)〕は単純過去時制が担っている。
- (6.3) Participant Property、Gnomic Present、Performative Verbs、Present Perfect Puzzleといった現象から、〔現在完了形〕は明確な〔現在〕時間指示

と {過去} 時間指示の両方を持っているが、{現在} 時間指示は、本来的に [単純現在時制] が有しているもので、[完了形] HAVE + *-en* は、現在時制を持つ現在における状態を差し引いた時間指示をされると考えられる。

- (6.4) Declerck (2006) では、現在完了形の時間指示を、現在時 (発話時) を含まないものとするが、過去との対比で {現在} 時間指示をする *nowadays* という副詞との共起制限から、現在時までを含む時間域を指示するものと考えられる。
- (6.5) 結論として、英語の [現在完了形] は、{不定非未来} 時間指示をする形態で、それ以外の HAVE + *-en* は、基準時を含む {非以降} 時間指示をする形態と言える。後者は定・不定を問わず時間指示をすることができる。

最後に、残された問題点として、[現在時制] の時間指示を除いた [完了形] の時間指示を明確にすることはまだ不十分で、副詞との共起関係や複文における振る舞いなどをさらに精査していく必要がある。つまり、今回は *nowadays* という副詞に限定して {非未来} 時間指示を結論としたが、他の時を表す副詞との共起関係は精査すべきである。また、同じ HAVE + *-en* という形式が表す {完了} と {過去} という2つの異なった意味の相互関係もしくはどちらの意味が本質的な意味であるかに関しても、明確にしていく必要がある。

References

- Allen, Robert Livingston (1966) *The Verb System of Present-Day American English*, Janua Linguarum, Mouton, The Hague.
- Anderson, John (1973) "On Existence and the Perfect," *FL* 10 333-337.
- 安藤貞雄 (1986) 『英語の論理・日本語の論理：対照言語学的研究』大修館, 東京。
- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』開拓社, 東京。
- Bache, Carl (1994) "Verbal Categories, Form-Meaning Relationships and the English Perfect," In Carl Bache, Hans Basøll, and Carl-Erik Lindberg eds. (1994), 43-60.
- Binnick, Robert I. (1991) *Time and the Verb: A Guide to Tense and Aspect*, Oxford UP, Oxford.
- Brinton, Laurel J. (1988) *The Development of English Aspectual Systems: Aspectualizers and Post-Verbal Particles*, Cambridge Studies in Linguistics 49, Cambridge UP, Cambridge.
- Chomsky, Noam (1971) "Deep Structure, Surface Structure, and Semantic Interpretation," *Semantics: an Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*, Eds. by Danny D. Steinberg and Leon A. Jakobovits, 183-216, Cambridge UP, Cambridge.
- Comrie, Bernard (1976) *Aspect*, Cambridge UP, Cambridge.
- Comrie, Bernard (1985) *Tense*, Cambridge UP, Cambridge.
- Davidson-Nielsen, Niels (1990) *Tense and Mood in English: A Comparison with Danish*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Declerck, Renaat (1991) *Tense in English: Its Structure and Use in Discourse*, Routledge, London.
- Declerck, Renaat (2006) *The Grammar of the English Verb Phrase, Volume 1: The Grammar of the English Tense System: A Comprehensive Analysis*, Topics in English Linguistics 60-1, Mouton de Gruyter, Berlin.

- 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』 改訂三版, 金子書房, 東京.
- Giorgi, Alessandra and Fabio Pianesi (1997) *Tense and Aspect: From Semantics to Morphosyntax*, Oxford UP, Oxford.
- Greenbaum, Sidney and Gerald Nelson (2009) *An Introduction to English Grammar*, 3rd ed., Longman, London.
- Harder, Peter (1994) "Verbal Time Reference in English: Structure and Function," *Tense, Aspect and Action: Empirical and Theoretical Contributions to Language Typology*, In Carl Bache, Hans Basøll, and Carl-Erik Lindberg eds. (1994), 61-79.
- 橋本功 (2005) 『英語史入門』 慶應義塾大学出版会, 東京.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott (2003) *Grammaticalization*, 2nd ed., Cambridge UP, Cambridge.
- 保坂道雄 (2014) 『文法化する英語』 開拓社言語・文化選書47, 開拓社, 東京.
- Huddleston, Rodney (1995) "The English Perfect as a Secondary Past Tense," *The Verb in Contemporary English*, Eds. by Bas Aarts and Charles F. Meyer, 102-122, Cambridge UP, Cambridge.
- Jespersen, Otto (1924) *The Philosophy of Grammar*, George Allen and Unwin, London.
- Klein, Wolfgang (1992) "The Present Perfect Puzzle," *Language* 68 (3), 525-552.
- 工藤真由美 (2004) 「I 調査の概要 — 東北方言から沖縄方言まで—」 『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系 — 標準語研究を越えて—』 工藤真由美編, 2-33, ひつじ書房, 東京.
- Lakoff, George (1970) "Tense and Its Relation to Participants," *Language* 46 (4), 838-849.
- Leech, Geoffrey (2004) *Meaning and the English Verb*, 3rd ed., Longman, London.
- McCawley, James D. (1971) "Tense and Time Reference in English," *Studies in Linguistic Semantics*, Ed. by Charles D. Fillmore and D. Terence Langendoen, 97-114, Holt, Rinehart and Winston, New York.
- McCoard, R. W. (1978) *The English Perfect*, North-Holland Linguistic Series 38, North-Holland, Amsterdam.
- Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary* (2008) Merriam Webster, Springfield, Mass. [*Webster*]
- Ogihara, Toshiyuki (1996) *Tense, Attitudes, and Scope*, Studies in Linguistics and Philosophy 58, Kluwer, Dordrecht.
- Ota, Akira (1963) *Tense and Aspect of Present-Day American English*, Kenkyusha, Tokyo.
- Oxford Advanced Learner's Dictionary* (2010) 8th ed., OUP, Oxford. [*OALD*⁸]
- Quirk, Randolph, et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Ritz, Marie-Eve (2012) "Perfect Tense and Aspect," *The Oxford Handbook of Tense and Aspect*, Ed. by Robert I. Binnick, 881-907, OUP, Oxford.
- Smith, Carlota S. (1997) *The Parameter of Aspect*, 2nd ed., Studies in Linguistics and Philosophy 43, Kluwer, Dordrecht.
- Swan, Michael (2005) *Practical English Usage*, 3rd ed. Oxford UP, Oxford.
- 寺島迪子 (1990) 「3. 2. 3 完了構文, 進行構文」 『歴史的に探る現代の英文法』 中尾俊夫・児馬修編, 110-125, 大修館, 東京.
- Tobin, Yishai (1993) *Aspect in the English Verb: Process and Result in Language*, Longman

Linguistics Library, Longman, London.

Trask, R. L. (1993) *A Dictionary of Grammatical Terms in Linguistics*, Routledge, London.

Yagi, Monako, Junko Machida, and Siobhán Ryan (2014) *It's Time to Read*, Nan'un-do, Tokyo. [*It's Time to Read*]

山田小枝 (1984) 『アスペクト論』三修社, 東京.

山岡洋 (2001) 「線の相対時制 [完了]」日本大学英文学会 『英文学論叢』49, 221 – 255.